

論文審査の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	宋 芳
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 Development of a nursing practice scale for rheumatoid arthritis treatment with biological disease-modifying anti-rheumatic drugs (生物学的抗リウマチ薬で治療する関節リウマチ患者への看護実践尺度の開発)			
論文審査担当者			
主査	教授	森山 美知子	印
審査委員	教授	折山 早苗	
審査委員	教授	田邊 和照	
〔論文審査の結果の要旨〕			
<p>関節リウマチ（Rheumatoid Arthritis: 以下，RA）は，関節痛，機能制限，関節の変形を伴う疾患である。2003年に導入された生物学的抗リウマチ薬（Biological disease-modifying anti-rheumatic drugs：以下，bDMARDs）は，化学物質で合成された一般的な薬剤と違い，新たな細胞および分子を標的とする薬剤であり，従来型合成抗リウマチ薬よりも効果的であるため，RAの治療を大きく進歩させた。一方で，感染防御の免疫機構の働きも抑えるため感染リスクが高まり合併症を起こしやすくなり，投与法は点滴静注と皮下注射があり自宅での自己注射もできるが，関節の変形や痛みによる注射手技の習得率の低さや身体機能の低下など，注射への不安や不快を感じる患者は多い。薬価も高額であり，持続的寛解を維持できても継続的な薬物療法の治療が必要で，注射の痛みのみならず心理的経済的負担や日常生活への支障など，寛解までに患者が体験する困難は少なくない。RAの治療に従事する看護師専門職は日本リウマチ財団のリウマチケア看護師（The Certified Nurse by Japan Rheumatism Foundation：以下，CNJRF）がいるが，CNJRF資格の申請条件と資格の維持には地理的，時間的に困難な課題があるため，多くのRA患者がCNJRFによる看護を受けられていない現状である。本研究では，bDMARDsで治療するRA患者をケアする看護師の看護実践を測る尺度開発を目的とし，尺度の信頼性・妥当性を検証した。</p> <p>日本リウマチ財団のCNJRFs 1268人から層化無作為抽出した960人と，リウマチ科を標榜する全国の2669病院からbDMARDsを確実にしている120病院を層化無作為抽出し，調査に同意した37病院の一般看護師（Registered Nurse：以下，RN）866人の計1826人へ無記名自記式任意のアンケート調査を行った。CNJRFsへの調査は2020年10月～12月，RNsへは2021年12月～2022年3月に実施した。調査内容は，対象者の基本属性（年齢，看護師経験年数，職位，RA患者の看護経験，CNJRF資格の有無），自作したbDMARDsで治療するRA患者への看護実践尺度の原案（19項目）およびリウマチ看護師の看護実践能力尺度（神崎ら，2018）であった。原案はbDMARDsを使用しているRA患者の既存研究の文献検討から明らかにした看護の役割をもとに，bDMARDsに関する看護実践項目をアイテム</p>			

プールとした。分析方法は、看護実践尺度原案の天井効果とフロア効果、I-T 相関および項目間相関を確認し、探索的因子分析および基準関連妥当性と既知グループ技法により、尺度の信頼性と妥当性を検討した。有意水準は両側検定で 0.05 とした。

結果として、CNJRFs から 466 人、RNs から 402 人の回答があり、看護実践尺度の欠損値がない 698 人を分析した(有効回答率 38.4%)。平均年齢は 44.0±10.1 歳で、看護経験の平均年数は 20.3±9.8 年であった。年齢・看護師経験年数・職位において 2 群間には差がみられた。看護実践尺度は、計 9 項目に天井効果があったが、bDMARDs の自己注射に関する項目が多く、いずれの項目も看護役割を測定する上で不可欠であると判断しすべての項目を分析に含めた。床効果、項目間相関および I-T 相関から削除する項目はなかった。探索的因子分析により、十分な因子負荷量を示さなかった 1 項目を除外し、看護実践尺度は【患者がセルフケア能力を向上する看護】【患者が意思決定に参加する看護】【チーム医療を推進する看護】の 3 因子 18 項目が抽出された。全体の Cronbach's  $\alpha$  係数は 0.95 で、各因子は 0.96, 0.91, 0.84 であった。本尺度とリウマチ看護師の看護実践能力尺度の下位尺度間の相関は  $r=0.170\sim0.698$  ( $p<.01$ ) で、合計得点間は 0.736 であった。専門資格の有無により既知グループ間の CNJRF 群と RN 群の 2 群比較で検討し、本尺度の合計得点 ( $p<.01$ ) と【患者がセルフケア能力を向上する看護】 ( $p<.001$ )、【患者が意思決定に参加する看護】 ( $p<.05$ ) において CNJRF 群が高値を示し、【チーム医療を推進する看護】 ( $p<.001$ ) において、RN 群が高値を示し、2 群間には差が認められた。

探索的因子分析の結果では、文献検討の結果と一貫して 3 因子構造となり、意図した概念構造が支持されたことを示した。基準関連妥当性を用いた既存尺度(神崎ら, 2018)との合計得点に強い相関を認めたため、項目の内容に重なりがあった可能性もうかがえたが、各因子間の相関は弱から中程度の相関を示した。専門資格の有無による看護実践力の得点は、CNJRF 群が高く出ており、この背景には CNJRF 群の経験年数や職位が有意に高かった影響を受けている可能性があると考えられる。以上のことから、本尺度の信頼性、基準関連妥当性、および構成概念妥当性は、概ね統計学的に許容範囲内であることが示唆された。

以上の結果から、本論文は、bDMARDs で治療する RA 患者をケアする看護師の看護実践を測る尺度としての信頼性と妥当性の検証、および看護実践の内容を明らかにした新規性が高く評価される。

よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。

最終試験の結果の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（看護学）	氏名	宋 芳
学位授与の条件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 Development of a nursing practice scale for rheumatoid arthritis treatment with biological disease-modifying anti-rheumatic drugs (生物学的抗リウマチ薬で治療する関節リウマチ患者への看護実践尺度の開発)			
最終試験担当者			
主査	教授	森山 美知子	印
審査委員	教授	折山 早苗	
審査委員	教授	田邊 和照	
〔最終試験の結果の要旨〕			
判 定 合 格			
上記3名の審査委員会委員全員が出席のうえ、令和5年8月21日の第180回広島大学保健学集談会及び令和5年8月21日本委員会において最終試験を行い、主として次の試問を行った。			
1 生物学的抗リウマチ薬を使用する患者の看護の特徴			
2 リウマチケア看護師に必要とされる能力の構造			
3 本尺度の特徴と他の類似尺度との違い			
4 尺度構築における信頼性、妥当性			
5 作成した尺度の将来的な活用			
これらに対して極めて適切な解答をなし、本委員会が本人の学位申請論文の内容及び関係事項に関する本人の学識について試験した結果、全員一致していずれも学位を授与するに必要な学識を有するものと認めた。			